

# 国際保健医療福祉学分野

## 論文

### A 欧文

#### A-a

- 1 . Yamada Y, Orita M, Matsunaga H, Yamaguchi T, Taira Y, Takamura N: Risk perception regarding implementation of iodine thyroid blocking during a nuclear disaster of mothers living near a nuclear power station in Japan.. *Endocrine journal* 68(5): 553-560,2021. doi: <https://doi.org/10.1507/endocrj.EJ20-0627>. (IF: 2.86)
- 2 . Takamura N, Orita M, Taira Y, Matsunaga H, Yamashita S: Experiences of crisis communication during radiation emergency and risk communication for recovery of the community in Fukushima.. *Journal of radiation research* 62(Supplement\_1): i95,2021. doi: <https://doi.org/10.1093/jrr/rraa113>. (IF: 2.438)
- 3 . Matsunaga H, Orita M, Taira Y, Takamura N: Risk perception of the pre-distribution of stable iodine to guardians of children living around the Genkai Nuclear Power Plant, Saga Prefecture, Japan. . *PloS one* 16(5): e0250570 ,2021. doi: <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0250570>. (IF: 3.24)
- 4 . Yamaguchi T, Taira Y, Matsuo M, Orita M, Yamada Y, Takamura N: LOCAL LEVELS OF RADIATION EXPOSURE DOSES DUE TO RADIOCESIUM FOR RETURNED RESIDENTS IN TOMIOKA TOWN, FUKUSHIMA PREFECTURE. *Radiation Protection Dosimetry* 193(3-4): 207-220,2021. doi: <https://doi.org/10.1093/rpd/ncab049>. (IF: 0.954)
- 5 . Matsunaga H, Orita M, Oishi K, Taira Y, Takamura N: Intention to return in residents of Okuma and its characteristics: the evacuation order was lifted eight years after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station accident. . *Journal of radiation research* 62(5): 868-870,2021. doi: <https://doi.org/10.1093/jrr/rrab058>. (IF: 2.438)
- 6 . Matsunaga H, Orita M, Liu M, Kashiwazaki Y, Taira Y, Takamura N: Evaluation of Residents' Timing of Return to or New Settlement in Kawauchi Village, at 10 Years after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident. . *International journal of environmental research and public health* 19(1): 543,2022. doi: <https://doi.org/10.3390/ijerph19010543>. (IF: 4.614)
- 7 . Matsunaga H, Orita M, Taira Y, Takamura N: Awareness of the implementation of stable iodine prophylaxis by parental guardians living in the urgent protective action planning zone of an operating nuclear power plant in Japan. . *BMC public health* 21(1): 2235,2021. doi: <https://doi.org/10.1093/jrr/rrab058>. (IF: 4.135)
- 8 . Keiko Oishi, Orita M, Taira Y, Kashiwazaki Y, Matsunaga H, Takamura N: Risk Perception of Health Risks Associated with Radiation Exposure among Residents of Okuma, Fukushima Prefecture. . *International journal of environmental research and public health* 18(24): 2235,2021. doi: <https://doi.org/10.3390/ijerph182413208>. (IF: 4.614)
- 9 . Matsunaga H, Kashiwazaki Y, Orita M, Taira Y, Takamura N: Risk perception of internal and external radiation exposure among administration staff affected by the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident. *Journal of environmental radioactivity* 248: 106869,2021. doi: <https://doi.org/10.1016/j.jenvrad.2022.106869>. 2.655)
- 10 . Fukahori S, Obase Y, Chizu Fukushima, Daisuke Takao, Iriki J, Ozasa M, Zaizen Y, Takamura N, Fukuoka J, Ashizawa K, Mukae H.: Determining response to treatment for drug-induced bronchocentric granulomatosis by the forced oscillation technique. *Medicina* 57(12): 1315,2021. doi: <https://doi.org/10.3390/medicina57121315>. (IF: 0.653)
- 11 . Tashiro K, Soutome S, Funahara M, Kawashita Y, Kitamura M, Fukuda H, Furugen R, Iwasaki T, Hayashida H, Kawasaki K, Higashi M, Nagayoshi M, Takamura N, Maeda T, Saito T.: The relationship between dental findings and tongue pressure: A survey of 745 community-dwelling adults and elderly persons in Japan. *Gerontology* 67(5): 517-524,2021. doi: <https://doi.org/10.1159/000513599>. (IF: 5.14)
- 12 . Tokunaga A, Yoshida K, Orita M, Urata H, Itagaki S, Mashiko H, Yabe H, Maeda M, Oishi K, Inokuchi S, Iwanaga R, Tanaka G, Nakane H, Takamura N: The mental health status of children who have been evacuated or migrated from rural areas in Fukushima prefecture after the Fukushima daiichi nuclear power station accident: results from the Fukushima health management survey. *Fukushima Journal of Medical Science* 67(7): 8-16,2021. doi: <https://doi.org/10.5387/fms.2020-15>. (IF: 0)
- 13 . Kashiwazaki Y, Takebayashi Y, Murakami M: The relationship between geographical region and perceptions of radiation risk after the Fukushima accident: The mediational role of knowledge.. *Radioprotection* 57(1): 17-25,2021. doi: <https://doi.org/10.1051/radiopro/2021027>. (IF: 1.015)

### B 邦文

#### B-a

- 1 . 野中 良恵, 松永 妃都美, 高橋 公一, 柴山 薫, 秋永 和之, 石橋 秋奈, 福山 由美, 新地 浩一: 災害支援ナースの教育に関する研究:—災害派遣の経験から災害看護教育の向上をめざして— . *Journal of Inclusive Education* 10: 1-16, 2021.

## 学会発表数

A-a	A-b		B-a	B-b	
	シンポジウム	学会		シンポジウム	学会
0	1	1	0	0	3

## 社会活動

氏名・職	委員会等名	関係機関名
高村 昇・教授	非常勤産業医	アルパイン株式会社
高村 昇・教授	富岡町行政不服審査会委員	富岡町
高村 昇・教授	長崎市国民保護協議会委員	長崎市
高村 昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館館長	福島イノベーションコナスト構想推進機構
高村 昇・教授	中間貯蔵所去土壌等の減容・再生利用時術開発検討委員会	環境省
高村 昇・教授	支援センター運営委員会委員	公益財団法人 原子力安全研究協会
高村 昇・教授	中間貯蔵所去土壌等の減容・再生利用時術開発検討委員会コミュニケーション推進チーム座長	公益財団法人 原子力安全研究協会
高村 昇・教授	臨床研究部 顧問	公益財団法人 放射線影響研究所
高村 昇・教授	共創アドバイザー	公益財団法人環境科学技術研究所
高村 昇・教授	排出放射能影響調査事業及び排出放射性物質影響調査整備等整備等事業検証委員会委員	青森県エネルギー総合対策局
高村 昇・教授	長崎県建築審査会委員	長崎県
高村 昇・教授	雲南市原子力安全顧問	島根県雲南市
高村 昇・教授	科学研究費委員会専門委員	独立行政法人 日本学術振興会
高村 昇・教授	風評払拭・リスク強化アドバイザー研究会外部有識者委員	復興庁
高村 昇・教授	福島県「県民健康調査」検討委員会委員	福島県
高村 昇・教授	福島県「放射線と健康」アドバイザー	福島県
高村 昇・教授	福島県放射線健康リスク管理アドバイザー	福島県
高村 昇・教授	文部科学省・放射線副読本 監修者	文部科学省
折田真紀子・助教	長崎県看護協会学会誌編集委員会 委員	長崎県看護協会

## 競争的研究資金獲得状況（共同研究を含む）

氏名・職	資金提供元/共同研究先	代表・分担	研究題目
高村昇・教授	日本学術振興会	代表	国際共同研究強化 (B) 「チェルノブイリから福島を知る～甲状腺超音波所見の自然史」
高村昇・教授	環境省	代表	大熊町、富岡町におけるリスクコミュニケーションを通じたリスク認知、メンタルヘルスの経時的変化の評価
高村昇・教授	環境省	代表	令和3年度 放射線健康管理・健康不安対策事業（放射線の健康影響にかかる研究調査事業）
高村昇・教授	福島大学	代表	帰還困難区域に隣接する地域における生活行動の違いによる個人被ばく線量評価
松永妃都美・助教	日本学術振興会	代表	基盤研究B 放射線防護リスクコミュニケーション現任教 育モデルの検証

松永妃都美・助教	日本学術振興会	分担	基盤研究C 多職種連携をめざした大学院における実践的な国際看護の教育プログラムの開発研究
----------	---------	----	---

## その他

### 非常勤講師

氏名・職	職（担当科目）	関係機関名
高村昇・教授	客員教授（福島原発事故と災害復興）	学校法人 昌平齋
松永妃都美・助教	非常勤講師（災害看護学）	佐賀大学医学部看護学科

### 新聞等に掲載された活動

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と社会との関連
高村 昇・教授	3月で被災から10年。これまでの調査や支援、伝承館の役割や意義について伝えた。	長崎新聞	2021年1月1日	3月で被災から10年。長崎大学の支援と現状、これまでの調査や支援、伝承館の役割や意義について伝えた。 東京電力福島第一原発事故の記憶や教訓を後世に伝えるために、2020年9月福島県が双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」を開設。旧ソ連のチェルノブイリ原発事故や福島第一原発事故で支援活動に携わり、長崎大原爆後障害医療研究所教授・福島県の放射線健康管理アドバイザーとして放射線の知識を伝えた。また、健康相談などを行ったことや、包括連携協定を結ぶ同県川内村・富岡町・大熊町を中心に復興支援に当たっていること、同県の意見・館長に要請されたことについて紹介された。
高村 昇・教授	福島医大が仮想空間で原子力災害訓練に取り組める教材用のソフトウェアを開発し、放射線医療で実績がある長崎大学が協力した。	福島民友	2021年1月1日	福島医大が、東日本大震災から丸10年を前に医療従事者らが対面せずに仮想空間で原子力災害訓練に取り組める教材用のソフトウェアを開発した。長崎大学は、放射線医療の実績があるため協力した。
高村 昇・教授	放射線を正しく理解するために、福島県富岡町にある富岡中富岡校で放射線教室を開いた。	福島民報	2021年1月3日	放射線を正しく理解するために、福島県富岡町にある富岡中富岡校で放射線教室を開き、長崎大学原爆後障害医療研究所の松永妃都美助教と折田真紀子助教が放射線の基礎知識や原発事故後の町内の放射線量の推移について紹介した。
高村 昇・教授	福島医大と長崎大の学生が原子力災害に取り組める教材用ソフトウェアを使い訓練を実施した。	福島民報	2021年1月22日	福島医大が医療従事者らが対面せずに仮想空間で原子力災害訓練に取り組める教材用のソフトウェアを開発した。福島医大と長崎大の学生がソフトウェアを使い訓練を実施、有事の対応に理解を深めた。
高村 昇・教授	同上	福島民友	2021年1月22日	同上

高村 昇・教授	西日本新聞が、「東日本大震災・原子力災害伝承館」について紹介をした。	西日本新聞	2021年2月14日	東日本大震災の発生から10年、福島県双葉町に昨秋開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」について、語り部による被災体験の活動と、新型コロナウイルス禍にありながら来館者数は当初の予測を上回ったことが紹介された。記事では伝承館の批判及び賛同についての意見があった。
高村 昇・教授	長崎大学で、復興学セミナーを開催し、地域再生で知見共有をした。	福島民報	2021年2月16日	長崎大学は、東京電力福島第一原発事故からの地域再生に向けた復興学セミナーをオンラインで開催した。遠藤雄幸川内村長、福島医大の山下俊一副学長とともに講演し、被災地の地域づくりについて知見を共有した。
高村 昇・教授	長崎大学で、復興学セミナーを開催し、地域再生で知見共有をした。	福島民友	2021年2月16日	長崎大学が、東京電力福島第一原発事故から3月で10年となるのを前にオンラインで「原子力災害復興学セミナー」を開催し、東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）の館長として「放射線防護について世代や職業など（伝える）ターゲットに合わせたリスクコミュニケーションを進めることが重要だ」と伝えた。
高村 昇・教授	東日本大震災と福島第一原発事故から10年を前に、長崎大学が開催したオンラインセミナーで、講演を行った。	福島民友	2021年2月16日	東日本大震災と福島第一原発事故から10年を前に、14日長崎大学が開催したオンラインセミナーで講演を行い、被災自治体ごとに住民の帰還率に差が出ている現状を紹介し「10年が経過して復興のフェーズに差が出ている。それぞれのニーズや状況に合わせた支援が必要だ」と伝えた。
高村 昇・教授	震災10年を前に、長崎大学がオンラインセミナーを開催し復興の現状を報告した。	長崎新聞	2021年2月16日	震災10年を前に、長崎大学がオンラインセミナーを開催し復興の歩みや村の現状を報告した。遠藤雄幸川内村長、福島医大の山下俊一副学長とともに講演し、被災自治体ごとに住民の帰還率に差が出ている現状を紹介した。「10年が経過して復興のフェーズに差が出ている。それぞれのニーズや状況に合わせた支援が必要だ」と伝えた。
高村 昇・教授	大熊町から会津若松市に避難中の母親たちから放射線の不安等に関する相談を受けた。	長崎新聞	2021年3月9日	長崎大学と福島県会津若松市を結んだオンライン中継で、長崎大学原爆後障害医療研究所の松永助教とともに、大熊町から会津若松市に避難中の母親たちから放射線の不安等に関する相談を受けた。同大は13年以降、同県内の3自治体（川内村、富岡町、大熊町）と包括連携協定を締結。被爆地での研究の知見を生かし、放射線量の測定や、避難先から戻った住民の健康相談に乗るなどの支援活動に取り組んできた。

高村 昇・教授	長崎大学が広報誌Choho特別号「福島と長崎大学これからの10年」を発行し、編集責任者を務めた。	長崎新聞	2021年3月12日	長崎大学の編集責任者として広報誌Choho特別号「福島と長崎大学これからの10年」を発行。東日本大震災発生から現在まで被災地への人材の投入など原爆後障害医療研究所を始め全学的に取り組んできた支援や現地の復興の軌跡を振り返るとともに今後の被災地の展望を紹介した。
高村 昇・教授	長崎新聞社が発行する情報誌NRに、長崎大学広報誌Choho特別号と東日本大震災・原子力災害伝承館での活動が紹介された。	長崎新聞NR	3・4号	長崎新聞社が発行する情報誌NRに、長崎大学広報誌Choho特別号と東日本大震災・原子力災害伝承館が紹介された。東日本大震災から10年が経過。長崎大学は、原爆後障害医療研究所が中心となって原発事故直後から福島へ人材を派遣し、福島県立医科大学の緊急被ばく医療再構築、福島県民へのリスクコミュニケーション、さらには福島県民健康調査立ち上げなどに尽力してきた。また、令和2年9月20日、福島県双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」が開設。伝承館は、地震や津波だけでなく、福島だけが経験した原子力災害の記録や復興の過程を収集・保存・研究し教訓とするための施設。館長に就任したことと、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり福島未来創造支援研究センター長であることが紹介された。
高村 昇・教授	東日本大震災・原子力伝承館（双葉町）が、同館で研究成果発表会を開催。	福島民報	2021年3月30日	東日本大震災・原子力伝承館（双葉町）が、同館で研究成果発表会を開催。上級研究員3氏とともに取り組み内容を報告した。複合災害の記憶と記録を後世に残すために、これまで取り組んできた調査研究の現状を発表するとともに今後の展望を語った。
高村 昇・教授	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンし半年が経過。インタビューを受け、これまでの活動内容を紹介した。	福島民報	2021年4月13日	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンし半年が経過。長崎で医師として原爆被爆者の診察をしたことを生かし高齢化する被爆者の健康のため健康講和を始めた。またチェルノブイリで医療支援を始め、被ばく線量の評価をした。10年前の原発事故直後に福島県放射線健康リスク管理アドバイザーになり県内で講演をした。その後長崎大のサテライトオフィスを置き、川内村や富岡町で住民の健康管理や安全・安心の確保、復興支援をしている。伝承館の活動について紹介し、今年3月から複合災害への対応を調査研究する活動を本格化させホールボディカウンターを導入し、社員と家族の安全・安心を確保することで離職者の増加を食い止めた。その他多くの会社と住民が放射性物質の量を測り食品検査できる様にし、研究者が記録し検証できる様にした。

高村 昇・教授	同上	山形新聞	2021年4月17日	同上
高村 昇・教授	同上	京都新聞	2021年4月18日	同上
高村 昇・教授	同上	高知新聞	2021年4月22日	同上
高村 昇・教授	同上	茨城新聞	2021年4月25日	同上
高村 昇・教授	同上	埼玉新聞	2021年4月30日	同上
高村 昇・教授	同上	信濃毎日新聞	2021年4月30日	同上
高村 昇・教授	同上	熊本日日新聞	2021年4月31日	同上
高村 昇・教授	創価学会長崎平和委員会による「長崎平和学講座」で、「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題し講演を行った。	長崎新聞	2021年4月19日	創価学会長崎平和委員会による「長崎平和学講座」で、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題して講演を行った。東京電力福島第1原発事故直後から福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに就任し専門家として自治体や住民に助言。「原爆から復興した長崎は福島にとって大きなサポーターになり得る。福島産の果物を買うだけでも大きなサポート」と支援を呼び掛けた。
高村 昇・教授	環境省主催対話フォーラムについて案内があり、パネルディスカッションの参加者として紹介された。	読売新聞	2021年5月7日	環境省が主催する「福島その先の環境へ。」対話フォーラムの案内があり、パネルディスカッションの出演者として小泉環境大臣らとともに紹介された。
高村 昇・教授	長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題して講演を行った。	長崎新聞	2021年5月8日	長崎市内で、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題して講演を行った。その際、聴講者より「福島の復興に取り組んでいくのは、原爆の悲惨さを知る長崎の使命です」と力強く述べられたことがとても印象に残ったとし、さらに福島県産の果物を購入することが大きなサポートになるという話に、これからは安心して購入していきたいとの意見が紹介された。
高村 昇・教授	環境省が除染土を巡る初の「対話フォーラム」を開催。オンラインで参加した。	福島民友	2021年5月24日	福島県内の除染で出た土壌を最大30年保管する中間貯蔵施設（大熊町、双葉町）を巡り、環境省が県外での最終処分に向けた初の「対話フォーラム」を開催。オンラインで参加し、小泉環境相らとともに除染で出た土壌の再生利用など最終処分量を減らす取り組みに理解を呼び掛けた。
高村 昇・教授	「被ばく医療総合研修センター」が、大学病院構内に開所し式に出席した。	朝日新聞	2021年6月25日	原子力災害に備えて専門人材を育てる長崎大学の「被ばく医療総合研修センター」が、大学病院構内に開所し、式に出席した。「被ばく医療総合研修センター」は、救命と除染・被爆線量評価のための設備を備え、九州の医療関係者らを迎えての研修を担う。

高村 昇・教授	長崎大学が「被ばく医療総合研修センター」を同大学病院内に開所。長崎大学病院や同大原爆後障害医療研究所の専門家として講師を務める。	長崎新聞	2021年6月25日	長崎大学が、全国的に不足している被ばく医療従事者の人材育成を目的とした「被ばく医療総合研修センター」を同大学病院内に開所した。長崎大学病院や同大原爆後障害医療研究所の専門家として講師を務め、学内スタッフのほか、本県、福岡、佐賀、鹿児島県内にある七つの原子力災害拠点病院の医師や看護師・放射線技師らが研修を受けることとなった。
高村 昇・教授	教授を務めている原爆後障害医療研究所(原研国際)の折田真紀子助教が、今年度長崎大学医学部が授与する「角尾学術賞」を受賞した。	読売新聞	2021年6月27日	教授を務めている原爆後障害医療研究所(原研国際)の折田真紀子助教が、今年度長崎大学医学部が授与する「角尾学術賞」を受賞した。受賞した研究は「東京電力福島第一原子力発電所事故後の福島県川内村・富岡町における住民の被ばくリスク認知評価」。折田助教は、放射線看護学の専門家として同原発の30キロ圏内にある川内村に派遣され、住民の健康不安の解消や相談活動などを行ってきた。16年以降は、同村に隣接する富岡町や大熊町にも同大の復興推進拠点が設けられ、スタッフの一人として長崎と福島県を行き来しながら支援を続けている。
高村 昇・教授	福島県内の中間貯蔵施設に運び込まれている除去土壌などについて、小泉環境省や他の有識者らとともに対話フォーラムで意見を伝えた。	読売新聞	2021年7月14日	福島県内の中間貯蔵施設に運び込まれている除去土壌などについて、小泉環境省や他の有識者らとともに対話フォーラムに参加し、「除去土壌の再生利用では、安全性の確保を大前提に、適切な管理の下で利用していくことが大事」等伝えた。オンラインで約1000人が参加。
高村 昇・教授	東京電力福島第一原発事故後、福島入りし県の放射線アドバイザーとして活動した10年について紹介された。	愛媛新聞	2021年7月30日	東京電力福島第一原発事故後、福島入りし県の放射線アドバイザーとして活動した10年について紹介された。福島県川内村の遠藤村長から「長崎大がなければ今の川内村はない」との意見を受け、今後の展望について伝えた。
高村 昇・教授	菅首相の退任に際し、東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として取材を受けた。	読売新聞	2021年9月4日	菅首相の退任に際し、東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として取材を受けた。昨年9月に首相が東日本大震災・原子力災害伝承館を視察し県民健康調査の展示に関心を示されたことを紹介し、今後も福島に関心を寄せてほしいと意見を述べた。
高村 昇・教授	環境省主催の対話フォーラムに、専門家として参加することが紹介された。	読売新聞	2021年9月5日	環境省が主催する「福島、その先の環境へ。」対話フォーラムに、第1回目に引き続き第2回目も小泉環境大臣らとともに専門家として対話セッションに参加することが紹介された。

高村 昇・教授	福島大環境放射能研究所の環境放射能学セミナーを開催。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長・福島未来創造支援研究センター長として講演を行った。	福島民報	2021年9月5日	福島大環境放射能研究所の環境放射能学セミナーがオンラインで開催。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長であり福島未来創造支援研究センター長として「原子力災害からの地域復興」と題し、川内村での復興支援活動を取り上げ講演した。村が長崎大と連携し、戸別訪問を通して住民の健康や安全を担保する事例などを紹介した。
高村 昇・教授	長崎大学は復興知夏季セミナーをオンラインで開催。川内村の川内ラボ交流室から講演を行った。	福島民報	2021年9月12日	長崎大学は復興知夏季セミナーをオンラインで開催。県内外の大学生が受講し、帰還困難区域周辺の線量やリスクコミュニケーションなどのテーマで講演とグループ討論が行われ、災害や被ばく医療科学を学んだ。川内村の川内ラボ交流室から講演を行い「被ばく医療やリスクコミュニケーションについて理解を深め、正しく知って正しく恐れることの重要性を知ってほしい」と語った。
高村 昇・教授	環境省が開催した二回目のオンライン対話集会上、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として参加。	福島民報	2021年9月12日	環境省が開催した二回目のオンライン対話集会上に長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として参加。対話集会のディスカッションでは、小泉環境相と共に東京電力福島第一原発事故に伴う除染廃棄物の県外最終処分に向け視聴者らからの質問・意見に答えた。
高村 昇・教授	環境省主催2回目の「対話フォーラム」で意見を伝えた。	福島民友	2021年9月12日	環境省は除去土壌処分の議論を深めるために県外での最終処分に向けた「対話フォーラム」の2回目をオンラインで開催。長崎大学教授・東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として意見を伝えた。
高村 昇・教授	環境省主催2回目の「対話フォーラム」で意見を伝えた。	河北新報	2021年9月13日	環境省は除染廃棄物の最終処分に向け、市民らが参加する第2回対話集会上をオンラインで開催。小泉進次郎環境相や他の有識者らとともに意見を伝えた。
高村 昇・教授	長崎大学が災害・被ばく医療科学について学ぶオンラインセミナーを開催し、講師を務めた。	福島民友	2021年9月14日	長崎大学は、「復興知」を活用した福島イノベーション・コースト構想推進機構の人材育成事業の一環として、災害・被ばく医療科学について学ぶオンラインセミナーを3日間開催した。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長であり長崎大の教授として講師を務め、富岡町の環境放射能や震災・原発事故の経験を伝承していく意義などについて伝えた。



高村 昇・教授	環境省主催2回目の「対話フォーラム」で意見を伝えた。	読売新聞	2021年9月26日	9月11日に開催された環境省主催2回目の対話フォーラムで、「再生利用」が解く除去土壌の問題について小泉環境相や他の有識者らとともに意見を伝えた。
高村 昇・教授	長崎大学が、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマにオンラインセミナーを開催し、講師を務めた。	福島民報	2021年10月13日	長崎大学は、川内村のかわうちラボにおいて東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマにオンラインセミナーを開催した。長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として講師を務め、「原発事故後、行政や住民、科学者が復興にどのように関わり、連携してきたかを知って欲しい」等と語った。
高村 昇・教授	長崎大学が、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマにオンラインセミナーを開催し、講師を務めた。	福島民友	2021年10月17日	長崎大学は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマに、海外の研究者や学生らを対象としたオンラインセミナーを開催した。長崎大で被ばく医療などを学ぶベラルーシやカザフスタン、中国からの留学生が村を訪れセミナーに参加した。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長であり同大の教授として講師を務め、「行政と住民、専門家が連携して復興をどう進めてきたのかを世界各国に広く知ってもらう機会となった」等と話した。
高村 昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館が、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催。俳優の辰巳拓郎さんと館長対談を行った。	福島民友	2021年11月7日	東日本大震災・原子力災害伝承館は、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催した。伝承館の館長として、俳優の辰巳拓郎さんと「3.11の経験とこれからの地域づくり」をテーマに対談。原発事故とコロナ禍で置かれている世界の状況が似ているとし、「地震津波原発事故による複合災害の教訓は、感染症や気候変動の問題にも応用できる。」と話した。
高村 昇・教授	長崎大と川内村は、「復興子ども教室」を開催した。福島県川内村の小中学生11人が、長崎市の爆心地公園や長崎原爆資料館などを訪問し、原爆の実相や戦後復興の歴史を学んだ。	長崎新聞	2021年11月8日	長崎大と川内村は、被災地の復興を担う人材を育てるため「復興子ども教室」を開催。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の影響を受けた福島県川内村の小中学生11人が、長崎市の爆心地公園や長崎原爆資料館などを訪れ、原爆の実相や戦後復興の歴史を学んだ。
高村 昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館が、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催。館長として俳優の辰巳拓郎さんと対談した。	福島民報	2021年11月8日	東日本大震災・原子力災害伝承館は、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催。伝承館の館長として俳優の辰巳拓郎さんと「3.11の経験とこれからの地域づくり」をテーマに対談し「複合災害の教訓は、感染症や気候変動などの問題にも応用できる」と伝えた。

高村 昇・教授	長崎大学が協力し「復興こども教室」が開催され、福島県川内村の子どもたちが被ばくリスクや地域復興を学んだ。	西日本新聞	2021年11月11日	長崎大学が協力して開催している「復興こども教室」の9回目として、福島県川内村の子どもたちが4～6日、県内を訪れ長崎市の平和公園や島原市の雲仙岳災害記念館を見学した。今年も村立川内小中学園6、7年の11人が参加し、被ばくリスクや地域復興を学んだ。
高村 昇・教授	福島の復興支援に主体的に取り組んできたことについて、原子力産業新聞のインタビューを受けた。	原子力産業新聞	2021年11月25日	長崎大学は福島県双葉町と包括連携協定を12月1日に締結する。これまでも、川内村、富岡町、大熊町と包括連携協定を締結し、各町村内に設置したサテライトオフィスを拠点として住民に寄り添った復興支援活動を行ってきた。福島の復興支援に主体的に取り組んできたことについて、原子力産業新聞のインタビューを受け、川内村、富岡町、大熊町での活動経験を振り返り、「地域ごとに復興のフェーズが全然違う。その違いを尊重しながら支援活動を行うことが重要」と伝えた。
高村 昇・教授	長崎大が福島県双葉町と包括連携協定を締結。伝承館館長で県放射線健康リスク管理アドバイザーとしてサテライトオフィスの活動内容などを説明した。	福島民報	2021年12月2日	長崎大は、福島県双葉町と町の復興と活性化に向けた包括連携協定を締結した。町内に復興推進拠点として、サテライトオフィスを設ける。締結式は、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で行われ、伝承館館長で県放射線健康リスク管理アドバイザーとしてサテライトオフィスの活動内容などを説明した。
高村 昇・教授	長崎大が福島県双葉町と包括連携協定を締結。長崎大・双葉町復興推進拠点で、同大原爆後障害医療研究所教授として活動する内容が紹介された。	福島民友	2021年12月2日	長崎大は、福島県双葉町と町の復興と活性化に向けた包括連携協定を結んだ。町民が安心して帰還・生活できるよう放射能に関する知識や情報の共有、健康影響への不安に応えるリスクコミュニケーション活動などに連携して取り組む。協定に基づき「長崎大・双葉町復興推進拠点」を設置。同大原爆後障害医療研究所教授として臨床心理士、保健師、薬剤師らとともに被ばく線量の評価や健康相談、講演活動を通じた住民の健康管理などを行うことが紹介された。

高村 昇・教授	長崎大は、福島県双葉町と包括連携協定を締結し、復興推進拠点を設置。原爆後障害医療研究所教授としての活動や東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として取材を受けた。	長崎新聞	2021年12月2日	長崎大は、福島県双葉町と包括連携協定を締結した。放射線量の検査や健康管理などに取り組み、住民の帰還、町の復興を支援する。福島県内の自治体と同様の協定を結ぶのは川内村、富岡町、大熊町に次ぎ4例目。双葉町役場内に復興推進拠点（サテライトオフィス）を設置し、震災直後から福島県内で復興支援に携わる。長崎大学原爆後障害医療研究所教授として、臨床心理士、保健師らとともに町民の外部・内部線量を測定・評価し、健康相談や講演活動を通じて安全・安心を担保していることが紹介された。東日本大震災原子力災害伝承館の館長として取材を受け「震災から10年がたつが福島で双葉町だけ住民が誰一人戻っていない。帰還は困難が伴うが、川内村などで培ってきた知見、経験を生かし、町の復興に貢献したい」等と伝えた。
高村 昇・教授	東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から10年がたち、福島の現状を伝える「長崎特別展」が開催。伝承館の館長であり長崎大原爆後障害医療研究所教授として話をした。	長崎新聞	2021年12月4日	東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から10年がたち、福島の現状を伝える「長崎特別展」が、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で始まった。展示は計約80点。伝承館の館長であり長崎大原爆後障害医療研究所教授として開会のあいさつをし、福島県で今も3万人余りが避難を余儀なくされていることに触れ「事故は過去のことではない。被爆地長崎の人たちに見てもらい、福島のことを自分のこととして考えてほしい」と伝えた。田上市長は、市民に来場を呼びかけた。
高村 昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館の長崎特別展が、長崎市の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開幕し、長崎大教授・伝承館館長として話をした。	福島民報	2021年12月4日	東日本大震災・原子力災害伝承館の長崎特別展が、長崎市の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開幕した。長崎の人々に震災と東京電力福島第一原発事故の複合災害に見舞われた県の現状と復興の歩みを伝えている。開会式が行われ、長崎市の田上市長・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の高比良館長とともに長崎大教授・伝承館館長としてあいさつをした。

高村 昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館の長崎特別展が、長崎市の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開幕し、長崎大教授・伝承館館長として話をした。	福島民友	2021年12月4日	東日本大震災・原子力災害伝承館による長崎県での出張展示が、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開幕。伝承館に展示している解説パネル約80点を設置。福島で何が起き、どのように復興を進めてきたのかを紹介することで、震災と原発事故の風化防止を図る。長崎大教授であり伝承館館長として開会式であいさつをし「長崎に生まれ育った者として、伝承館の特別展示が長崎で行われることは感慨深い。長崎の皆さんに、福島のことを自分事として考えてほしい」と伝え、来館者に展示物の説明をした。
高村 昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館の長崎特別展が開催。開会式で、長崎大学原爆後障害医療研究所教授・伝承館館長として話をした。	毎日新聞	2021年12月10日	東京電力福島第一原発事故の教訓や復興状況を伝える「長崎特別展」が、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開催。主催は、東日本大震災・原子力災害伝承館。長崎大の被ばく医療の専門家として、原発事故直後から10年がたった今も活動や交流が続いている縁などから、特別展が実現。伝承館職員の講和や、市長のあいさつとともに、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授・伝承館館長として、全町避難が続く双葉町に触れ「原発事故は決して過去のことではない。福島のことを『自分事』として考えてほしい」と伝えた。
高村 昇・教授	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で「長崎特別展」を開催。	長崎新聞	2021年12月12日	館長を務める福島県双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館が長崎市の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で「長崎特別展」を開催。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の被災当時の福島の街や、人々の歩みを感じてもらうため、不明者捜索の写真など約80点が展示された。伝承館が県外で本格的な展示会を開くのは初めて。
高村 昇・教授	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で「長崎特別展」を開催。	西日本新聞	2021年12月14日	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、東日本大震災、原子力災害当時の状況を伝える企画展を長崎市の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開催。伝承館職員が被災体験を語り、被爆者と対話したことが紹介された。
高村 昇・教授	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、震災をテーマにした映画「家路」の関連イベントを開催。	福島民友	2021年12月17日	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、2014（平成26）年に公開された震災をテーマにした映画「家路」の関連イベントを開催。映画の舞台は、震災と東京電力福島第一原発事故後の福島県。撮影当時と震災から10年以上が経過した現在の姿を比べ、被災地の移り変わりなどを発信する。撮影は13年、川内村や富岡町などで行われ、松山ケンイチさん・田中裕子さんらが出演する。

高村 昇・教授	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、震災をテーマにした映画「家路」の関連イベントを開催したことで、来年開催予定のトークイベントに専門家として参加することが紹介された。	福島民報	2021年12月17日	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館が、2014（平成26）年に公開された映画「家路」をテーマにしたオリジナル映像の上映とパネル展を開催。映画は、震災と東京電力福島第一原発事故発生後の福島県が舞台となっている。伝承館は来年、監督を招いてトークイベントを開催予定。専門家としてパネリストに加わることが紹介された。
---------	--	------	-------------	--

## 学術賞受賞

氏名・職	賞 の 名 称	授与機関名	授賞理由、研究内容等
松永妃都美・助教	Excellence award (2021.11.28)	Asian Society of Human Services	発表内容が最も優れていたため、 研究（発表）内容：Risk Perception of the Pre-distribution of Stable Iodine to Guardians of Children Living around the Nuclear Power Plant in Operation, Japan
折田真紀子・助教	第38回角尾学術賞	長崎大学	東京電力福島第一原子力発電所事故後の福島県川内村・富岡町における住民の被ばくリスク認知評価